

『失われた時を求めて』における実在と架空の「場所」をめぐる一考察

田 中 幸 作

A Study on the Real and Imaginary PLACES in “A LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU”

Kousaku Tanaka

Key words

Proust, A la recherche du temps perdu, real place, imaginary place, lecture, fact and fiction

は じ め に

『失われた時を求めて』⁽¹⁾（以下、R.T.P.と略す）に登場する様々な場所、土地、地名は、実在のものと架空のものに大別出来る。しかし、たとえば、作品中に現れる実在の地名や場所であっても、そこを訪れたことがある者とそこを訪れたことはなく、その土地の風景や地理を理知的に思い描くしかない者では、作品中に描かれたその土地に対する印象は異なるであろう。また、その土地を訪れた経験がある者も、作品中の実在の土地の時代背景が大きく異なる設定となっている場合、そこは、馴染みが薄く見知らぬ場所と変わりがないと言えよう。さらに、実在しているが馴染みの薄い地名の場合は、実在の地名を架空のものと思い込んでしまうことも起こり得るわけである。あるいは、架空の地名ではあっても、そのモデルとなった実在の地名を察する読者の存在も否定できないわけである。さらに、文学自体が有する真実性や虚構性の鏡に一個の作品が写し出されたとき、実在と架空との間に水平線のごとく確かに横たわるであろう境界は如何なるものとなり、また、如何にその二元性や作品の下での統一性を保つのであろうか。小論では、R.T.P.に登場する実在と架空の地名⁽²⁾の内、コンブレー（COMBRAY）とヴェネチア（VENISE）に注目し、実在と架空の地名の混在の意味を、R.T.P.の主題や作品構造の内に探ることで、「読み」の多様性の一端に触れてみたい。

I

全7篇からなるR.T.P.の第1篇は3部構成となっており、それぞれに短いタイトルが付けられている。第1篇の題名はDU COTE DE CHEZ SWANN（スワン家のほうへ）、そして、第1部には架空の地名であるCOMBRAY（コンブレー）、第2部にはUN AMOUR DE SWANN（スワンの恋）、第3部にはNOMS DE PAYS : LE NOM（土地の名：名）と小タイトルが並んでいる。スワンとは如何なる人物であり、スワン家は何処にあり、スワン家の「ほう」とは何処を基点としているのか、コンブレーとは如何なる場所なのか。失われた「時」を見出すための旅の始まりは、ある「場所」探しの始まりのようでもある。

第1篇第1部のタイトルであるコンブレーは、タイトルの段階³⁾では固有名詞であることのみが明らかなのであるが、それが、固有の地名であること、主人公である語り手が幼い頃そこにあった彼の祖父母の家で寝室を与えられていたこと、長く居住していたわけではないが家族として一定期間そこに滞在が可能であったことが、次のような記述によって一気に明らかとなる。

(A)(・・・) je me disais: (1)《Tiens, j'ai fini par m'endormir quoique maman ne soit pas venue me dire bonsoir》, j'étais (2) à la campagne (3) chez mon grand-père, mort (a) depuis bien des années ; et mon corps, le côté sur lequel je reposais, gardiens fidèles d'un passé que mon esprit n'aurait jamais dû oublier, me rappelaient (4) la flamme de la veilleuse de verre de Bohême, en forme d'urne, suspendue au plafond par des chaînettes, (5) la cheminée en marbre de Sienne, (6) dans ma chambre à coucher (7) de Combray, (b) chez mes grands-parents, en des jours lointains qu'en ce moment je me figurais actuels sans me les représenter exactement, et je reverrais mieux tout à l'heure, quand je serais tout à fait éveillé. (I 6)⁴⁾ [() の表記は論者による。以下の抜粋においても同様。]

訳)⁵⁾私は自分に言うのであった、(1)「おや、ママが僕にお休みを言いに来なかったのに、眠ってしまったんだな。」私は、(2) 田舎の (a) 何年も前に亡くなった (3) 私の祖父の家にいるのであった。私の肉体、私が下にして寝た脇腹、それら、私の精神が決して忘れることは無かったであろうある過去の、忠実な保管者たちは、天井から鎖でつるされている (4) 壺形をしたボヘミアガラスの終夜灯の炎とか、(5) シエナ⁶⁾大理石の暖炉とかを私に思い出させるのであって、それらがあったのは (7) コンブレーの (6) 私の寝室、(b) 私の祖父母の家での、遠い昔の日々なのだが、いまそれらは、正確に現前させることは出来なくても、現在のこのように思い浮かべられるのだ。そしてやがて私がすっかり目を覚ましたときには、それらはもっとはっきり見分けられるだろう。[() の表記は抜粋に対応。]

この叙述には、R.T.P.全篇における「名」の最初の提示の際の一方法が見て取れる。語り手の記憶に残る具体的な出来事 ((1) ママが僕にお休みを・・・) が先ず示され、次にその出来事があった場所 ((2) 田舎の・・・, (3) 私の祖父の家にいる・・・) とその場所に因む非常に個人的な思い出の事物 (4) ボヘミアガラスの・・・ (5) シエナ大理石の・・・ (6) 私の寝室・・・) の提示がある。そして、地名 ((7) コンブレー) のように、ただひとつの言葉によって時間を越えて長く記憶に留まり、ある空間の印象に直結し、またそのイメージの中心に存在し得る固有名詞が最後に提示されている。つまり、R.T.P.の語り手は、過去の出来事を遠い思い出として物語り始めるわけではなく、実人生における最も古い出来事さえ現在に最も近い出来事を思い出すかのように、「現在」という確定しがたい時間概念の内に、ひとつの印象の塊と既になってしまっているものとしてではない、その印象全体を構成する出来事の経緯や具体的な事物の断片のひとつひとつを拾い集め再構築することを課せられたひとりの登場人物なのである。そのような語り手は、一般的な回想とは異なり、コンブレーという固有名詞を、ある思い出の想起の際における「引き

金」のようなものとしては提示しない。また、地名であるコンブレーが、抜粋(6),(7),(b)にあるように“dans ma chambre à coucher de Combray, chez mes grands-parents”と提示されていることに注意しなければならない。ここでのコンブレーという地名には、例えば“dans ma chambre à coucher, chez mes grands-parents, à Combray”と表現される場合のような自立性はこの時点では与えられてはいないのである。また、ここでは、語り手のコンブレーの寝室が、(3)祖父の家にあったものであることが先ず提示され、その祖父は(a)何年も前に亡くなっており、一旦は不在の人物として提示された直後には、(b)祖父母の家との認識が示され、その後の展開においては、コンブレーでの古い出来事、さらに古い記憶が呼び起こされ、語り手と祖父との具体的な実際の係わりについての記述が並んでいる。この時点で、「何年も前に亡くなった祖父の家にいる」と語り手が一瞬表明できるのは、「失われた時」の探索者である主人公「私」が、物理的時間経過を基本的には保っている一連の回想の物語の中にいて、その回想の中にある最も古い「過去」から最も遠い「現在」、それは結果としてR.T.P.の大団円に最も近接した「時」を内包するはずであるのだが、そのような時点においてさえ、すべてを知り、すべてを語ることが出来る語り手であることを拒否し、その不確実性、不可能性を表明している結果なのである。なぜなら、冒頭の語り手は、サン・ルー夫人の存在を知っているように⁽⁷⁾、祖父の死だけではなく祖母の死も知っている作中人物であるからである。語り手は、コンブレーの全てを知りながら、「私の寝室」の思い出に結びつくことによってしか立ち現れないコンブレー以外、何も知らないのである。さらに、コンブレーは、R.T.P.の導入部分において、読者に最初に提示されている地名であることによって、作品全体の構成における特権的な地位が与えられているであろうこと、あるいは与えられ始め、また与えられていた地名であることを忘れてはならない。R.T.P.の冒頭の一句である“Longtemps, je me suis couché de bonne heure.”をめぐる新たな解釈⁽⁸⁾が今も続けられているように、小説作品の冒頭部分に込められた作者の様々な意図は、物語の結末へ直結し、また、その結末に向かって展開する物語のプロットに深く関わっているであろうことは言うまでもない。コンブレーは、架空の土地であることによって、実在の地名が保持し続けているであろう歴史的、地理的、文化的な呪縛からも、「現在」からも、「過去」の思い出からも解放され、しかしながら作品の小説形式やその芸術性を確保するために恣意的に作者自身が選び取る様々な要素を、作者の思いのまま内包させることが可能な場所であり、それはひとつの言わば文学空間における「理想郷」としての役目を担っているのである。そして、この架空の場所は、語り手の幼年時代と重なることによって実人生における「理想郷」でもあり、そのような二重の意味を与えられているコンブレーは、大伽藍にもたとえられる長大なR.T.P.全体をその冒頭から最終章に至るまで支えることとなる架空と実在とを問わず様々な土地やそこに暮らす人々、それら登場人物が引き起こす様々な出来事、日常生活の中にある様々な物、自然や風景などを求心的に内包しているのであり、それらを、語り手の回想の中心から表層への噴出、ときには表層から中心への沈殿とも呼びうるような大胆な言語活動によって描き出しているのである。

II

R.T.P.に登場する実在の地名ヴェネチア(VENISE)の最初の提示は、コンブレーと同様に物語の早い段階、R.T.P.導入部分の次のような記述に見出せる。

(B Ⅹ ・ ・ ・) je passais la plus grande partie de la nuit à me rappeler notre vie d'autrefois à Combray chez ma grand'tante, à Balbec, à Paris, à Doncières, à Venise, ailleurs encore, à me rappeler les lieux, les personnes que j'y avais connues, ce que j'avais vu d'elles, ce qu'on m'en avait raconté(I 9)

訳) 私は、昔の私たちの生活、コンブレーの大叔母の家や、バルベック⁽⁹⁾や、パリや、ドンシエールや、ヴェネチアや、その他の数々の土地での生活を思い出し、様々な場所、そこで知りあった人々、その人たちについて見たことや聞かされたことを思い出して夜通し過ごすのであった。

この記述に表れる五つの地名の内、コンブレーを除く四つの地名は、作品への最初の登場となっており、ヴェネチアはその中のひとつとして提示されている。物語のこの段階においてコンブレーは語り手の思い出の場所であり、そこには語り手の原初の風景や社会生活の始まりがあったことが既に描かれているわけだが、具体的な名を伴って列挙されているバルベック、パリ、ドンシエール、ヴェネチアは、一挙に、語り手の生活(=人生)があった場所であり、思い出の地であると語られている。このことは、その後の物語の展開において、これらの地名は、それらが如何なる形で登場また提示されようとも、語り手がいつの日か訪れ生活することが決定され、あるいは既に訪れ生活したことがある場所であることを明示してしまっているのであろうか。ただ少なくとも、架空の地名バルベックとドンシエールは、実在の地名パリやヴェネチアと並んで提示されることによって、その最初の提示であるにもかかわらず、親しい固有名詞となって作品内で一気に機能し始めるのである。さて、語り手にとってヴェネチアは、その滞在が実現するまで想像の中にある地名であり憧れの地として存在するのであるが、語り手のヴェネチア滞在は、R.T.P.の第6篇 LA FUGITIVE(逃げ去る女)の後半部分において、次のように実現したことが物語り始められる。

(C) Quant à la troisième fois où je me souviens d'avoir eu conscience que j'approchais de l'indifférence absolu à l'égard d'Albertine(et cette dernière fois jusqu'à sentir que j'y étais tout à fait arrivé) ce fut un jour, assez longtemps après la dernière visite d'Andrée, à Venise.

Ma mère m'y avait emmené passer quelques semaines et---comme il peut y avoir de la beauté, aussi bien que dans les choses les plus humbles, dans les plus précieuses---j'y goûtais des impressions analogues à celles que j'avais si souvent ressenties autrefois à Combray, mais transposées selon un mode entièrement différent et plus riche.(III 623)

訳) アルベルチーナに対して完全な無関心に近づいていると意識したのを思い出す三回目は(そしてこれが最後の回となって私はついにまったくの無関心に到達したと感ずるのだが)、それはアンドレの最後の訪問の後かなり長くたったある日のヴェネチアでだった。母がそこに私を連れて行って数週間過ごさせてくれたのだった。そして 美は、最も貴重なものの中にあると共に、また最もつまらないものの中にもありうるのだから 私がそこで味わった様々な印

象は、昔コンブレでどのように何度も身に覚えた印象に良く似ていて、ただ、それがまったく異なる音階、より豊かな音階に応じて移調されたにすぎないのであった。

実在の地名が、語り手にとって、現前するもの、真に実在するものとなった瞬間であるとも言えるわけだが、ヴェネチアの印象がかつてのコンブレでの印象と良く似ていると表明され、昔のコンブレにおける語り手と語り手の母親との関係とヴェネチア滞在時点での二人の関係を軸として、ヴェネチアとコンブレこれら二つの土地の比較が語られ始める。さらに、語り手の念願であったヴェネチア滞在の実現は、R.T.P.第2篇 A L'OMBRE DES JEUNES FILLES EN FLEURS (花咲く乙女たちのかげに)の第2部 NOM DE PAYS: LE PAYS (土地の名: 土地)に登場し、第3篇 LE COTE DE GUERMANTES (ゲルマンのほう)、第4篇 SODOME ET GOMORRHE (ソドムとゴモラ)、第5篇 LA PRISONNIERE (囚われの女)、そして抜粋(C)がその後半に提示される第6篇に至るまでの最も主要な作中人物であるアルベルチヌの死と彼女の不在によって引き起こされる語り手の彼女に対する忘却や数々の心象の復活、それらが頂点に達した直後の彼女への絶対的な無関心が謳われているパラグラフ内に提示されていることにも注目しなければならない。実際、語り手のアルベルチヌに対する無関心の確認が、例の電報の差出人の読み違いの挿話によって、その後表明されるわけである。さて、ヴェネチア滞在、つまり語り手と語り手の母親との待望のヴェネチア旅行が描かれているはずの一連の叙述においては、その物語の表出や展開に漠とした不思議さが付きまとう。ヴェネチアの太陽は滞在中の語り手のホテルの窓に散策中の語り手自身に確かに降り注ぎはするのであるが、太陽そのものはかつてのコンブレの太陽となんら変わるところがないと語り手には思えるのであり、ただ母親がずいぶん年をとってしまったという想いに囚われるばかりなのである。また、パリへ列車で戻る描写はあるものの、語り手の少年時代からの憧れの地であり、語り手の病が障害となって延期されてきた待望の旅の道中、おそらく心躍っていたに違いないヴェネチアへの往路がまったく描かれていない。さらには、このヴェネチア滞在の時期、つまりその季節についてさえ明確な描写が見当たらないことである。実名で登場するヴェネチアは、回想の中にあって、まるで夢に現れる思い出の断片のように純粋で観念的なものとして描かれてしまっているかのようである。また、抜粋(C)における、単純過去形 *ce fut* の使用と不特定な日時 *un jour* の設定は、語りの時間的秩序から読者を一旦解放してしまい、空間的に独立し得る回想の存在の可能性が、そこには見出せるように思われる。語り手と語り手の母親とのヴェネチア滞在、それは旅であるからには、始めと終わりがあるように Pléiade 版で54ページ程のひとつの物語とも呼びうるこの部分は、語り手の生まれる前の出来事が三人称で語られている第1篇第2部の『スワンの恋』の物語と同じように、R.T.P.の構成や物語の展開の暗示の中において、独自の位置を占め、『スワンの恋』はその冒頭部分を、『ヴェネチア滞在』は最終部分を、あたかも二本の柱のように支えているのである。

III

架空の地名コンブレは、作者ブルーストが幼年時代を過ごした、パリの南西100 km ほどに位置する実在の村 Illiers (イリエ)³⁰⁾とパリの西端に位置する住宅地 Auteuil (オートゥイユ)が、主要なモデルとなっていることが広く知られている。コンブレがイリエやオートゥイユと結びつく

のは、R.T.P.に描かれた家、建物、教会、広場、庭、道、川、花々、木々といった風景や自然や情景が実在の二つの場所に似ており、また伝記的にも明らかとなっている作者ブルースト自身の幼年期のいくつかの実際の出来事と語り手が語る作品中の出来事に共通性があるからだけではない。コンブレーは、これら二つの実在の土地がそうであるように、あるひとりの人間がその幼年時代という多感な時期を過ごした「場所」として設定されているからである。

コンブレーの周辺には、語り手が、少年時代に散歩した二本の散歩道があったことが、次のように述べられている。

(D) Car il y avait autour de Combray deux 《côtés》 pour les promenades, et si opposés qu'on ne sortait pas en effet de chez nous par la même porte, quand on voulait aller d'un côté ou de l'autre : le côté de Méséglise-la Vineuse, qu'on appelait aussi le côté de chez Swann parce qu'on passait devant la propriété de M. Swann pour aller par là, et le côté de Guermantes. (I 134)

訳) なぜなら、コンブレーの周辺には、散歩に出るのに二つの「ほう」があった、そしてこの二つの方向はまるで反対なので、どちらへ行こうとするときも、同じ門から家を出るということは実際にはなかったからである。その一つは、メゼグリーズ＝ラ・ヴィヌーズのほうであって、おなじくまたスワン家のほうとも呼ばれていたが、それはスワン氏の所有地の前をとってそちらへ行くからであった、そしてもう一つは、ゲルマントのほうであった。

この二つの散歩道は正反対の方向にあったので、同じ日にこの二箇所の散歩を同時に行ったことさえ当時は一度もなかったことになっているのであるが、コンブレーという地理的なひとつの空間の境界線上において、これらの二つの道は、別々の出発点を持っているだけではなく、語り手が「同じ門から家を出るということは実際にはなかった」と述べているように、コンブレーの家の敷地の門、つまり、家という空間の境界線を越える瞬間にすでに二つの別々の出発点を有していたことになっている。この二つの散歩道は、抜粋(D)にあるように、「スワン家のほう」、「ゲルマントのほう」と呼ばれているのであるが、スワンとゲルマントという二つの名の間には、ユダヤ人の両替商と古い貴族名、語り手の友人と知り合うことさえまなぬ一族、芸術の理解者であると共に語り手の憧れでもある上流社会へ出入する人物と芸術の真の意味を知らない上流階級の人々などといった対立が見出され、幼年期にある語り手の未来の人生の選択を予想させる設定ともなっている。決して交わり重なることがないと思われる二つの道、それは二つの名前であり人物たちでもあるわけだが、その出発点が、コンブレーという地名が持つ境界線上ではなく、さらに狭い境界線に囲まれている空間である語り手の家の二つの門、さらに言えば語り手の寝室を出る瞬間にあったとすれば、抜粋(A)におけるコンブレーという架空の地名の最初の提示に際しての「語り手の寝室」、その狭い「場所」は、物理的な時間の流れの中であって、すべての出発点でありまた同時にすべてを集束させるような空間的な一点として提示されていると捉えることも可能である。

語り手が少年期に抱いた希望や夢や理想、悲嘆や落胆や悔恨、それらの結束点である語り手の部屋から延びている象徴的なこの二本の散歩道は、R.T.P.最終篇『見出された時』の冒頭部分にお

いて、語り手が当時信じ込んでいたほどに地理的に異なった方向（le côté）にはなかったことが、サン・ルー夫人となったジルベルトの口から明らかになるのである。ただしそれ以前の問題として、ジルベルトはスワンの娘であり彼女の夫サン・ルーはゲルマント家の一員であり、二人の結婚の事実、つまりサン・ルー夫人の存在あるいは登場は、二本の散歩道「スワン家のほう」と「ゲルマントのほう」が有する様々な象徴性の崩壊の瞬間でもあり、また融合の瞬間でもあるはずである。一般的な読者にとっても語り手にとってもそのような瞬間であるべきジルベルトとサン・ルーとの結婚は、先に扱ったヴェネチア旅行のパリへの帰りの列車の中、ヴェネチアで受け取った例の差出人をアルベルチヌと勘違いした語り手宛のジルベルトからの電報によって明らかとなるのであるが、その場面の語り手の驚きは、母親への、二人の結婚の事実を告げる普通の驚きの表現を伴った言葉によってのみ知ることが出来るのである。そのことを知った語り手の心境はそれ以上明確には描かれておらず、語り手とその母親は、もうひとつの同じような身分の違うもの同士の結婚の知らせ、それはサン・ルーからの手紙によってヴェネチアにもたらされたものであるのだが、その結婚話との比較や社交界のこと、昔のスワン氏のことなどを話題にするばかりなのである。物語の筋から言えば、ジルベルトは語り手の初恋の女性でありサン・ルーは語り手の親友であるわけである。その後ジルベルトを忘れるかのようにアルベルチヌを愛し始め、アルベルチヌの死つまり不在による忘却といった経緯があり、さらに思い違いによる彼女の復活と忘却の再認識が語り手のヴェネチア旅行の主要なプロットのひとつに違いないのではあるが、ここには、生身の人間が持っているごく普通の感情の表出や、あるいは語り手の事実や事物に隠された真実を探求するそれまでの姿勢が希薄であり、何かしらもどかしい不可解さが付きまとうのである。

さて、コンブレーの隣にあるタンソンヴィルのサン・ルー夫人の家、そこはかつてサン・ルー夫人つまりジルベルトの父親スワンの家であり「スワン家のほう」の言わば終点地であるわけだが、その家に逗留中の語り手はジルベルトと一緒に、少年時代の散歩道をコンブレーに向けて逆方向に辿る道すがら彼女の次のような言葉を聴くことになる。

(E) Et la troisième fois fut quand Gilberte me dit: «Si vous voulez, nous pourrions tout de même sortir un après-midi et nous pourrions alors aller à Guermantes, en prenant par Méséglise, c'est la plus jolie façon», phrase qui en bouleversant toutes les idées de mon enfance m'apprit que les deux côtés n'étaient pas aussi inconciliables que j'avais cru. Mais ce qui me frappa le plus, ce fut combien peu, pendant ce séjour, je revécus mes années d'autrefois, désirais peu revoir Combray, trouvai mince et laide la Vivonne. (III 693)

訳) 第三番目は、ジルベルトがこう言ったときだった、「よろしければ、午後すぐに出掛けるといいんですの、そうすれば、メゼグリーズを通してゲルマントに行くことが出来ます、それが一番スマートな行き方なの」、この言葉は、私の少年時代のあらゆる観念をことごとく転倒しながら、私にこう教えてくれた、この二つの方 は、私が思い込んだように両立しがたいものではなかったことを。しかし、私にとって最も衝撃的だったのは、この逗留の間、昔の私の年月をもう一度生きることがめったになかったこと、コンブレーをもう一度見た

いという欲望をほとんど抱かなかったこと、ヴィヴォーヌ川がやせて 醜くなっているのを見出したことだった。

語り手がそして読者がジルベルトとサン・ルーの結婚を知った箇所(III 655)における、二つの名前とそれらに直結し厳然と存在する二つの「方」に対する語り手の無関心ぶりは、あたかも R.T.P.の物語構成の秩序のために、不自然ではあるが、その必要性の必然のためであったかのように、ジルベルトのここでの言葉は、少年時代の語り手の地理的な思い込みや想像の世界を一挙に覆すのである。さらに、語り手は、これら二つの「方」の両立(=和解)以上に、心に衝撃を受けたこととして、タンソンヴィル逗留中には、幼年期のコンブレーでの思い出も含めそれまでの人生を回想することもなく、あまりにも容易に行き着くはずのコンブレーを見てみたいという欲望さえ起きず、幼年時代には自然の永続性への信頼の下で神秘に満ちていたはずのヴィヴォーヌ川の変容ぶりの発見を挙げている。実際には、ジルベルトによって、彼女もまた年を重ね往時の面影は失ってしまっているのだが、一方的にコンブレーでの幼年期の思い出が話題となり、少年時代の語り手の勘違いや思い過ごし暴露され当時のコンブレーが語り手の中で蘇ってゆく展開はあるにせよ、やせて醜くなってしまったヴィヴォーヌ川と同様、もはや、コンブレーはかつてのコンブレーではないことがここでは暗示されているのであろう。R.T.P.には、語り手の母親の死¹¹⁾は描かれていないのであるが、語り手とのヴェネチア旅行の場面以降における母親の存在は、語り手のコンブレーでの幼年時代そして少年時代よりヴェネチア旅行までの回想の中にある存在としての提示となっていることから推測し得るのは、この時点で語り手の母親はおそらく死を迎えており、二度と戻ることが出来ない幼年期の母親との思い出の場所コンブレーへの再訪は、言わば母親という存在の二重の不在を確認することになるのであって、語り手は、新たな悲しみを引き起こすことになったであろうコンブレー再訪を断念したのではないかと想像することも可能である。架空の地名コンブレーは、名のみの提示によって確固たる様々な印象を引き連れている実存の地名と同様に、この時点においては、もはや架空の場所として意味を作品中でおそらく失い始めているのであって、実存の地名であるヴェネチアが、数々の恣意的な偶然を引き連れ、しかもヴェネチア旅行実現の経緯が示されることもなくあまりにも唐突に偶然叶ったかのような旅の地として出現しているのは、作品の構造そのものとまた物語の劇的な純然たる構成のために、つまり作者の文学的美学のために、逆に実在の場所としての意味を失ってしまっているとも出来るのである。

お わ り に

『失われた時を求めて』には、建物や通り、公園や河川等も含めれば、一千箇所ほどの場所に関する名称が登場する。その中にあって、語り手がその人生の大半を過ごすパリ(PARIS)は、最も頻繁に作品中に登場する地名である。しかし、パリは、語り手の生涯の大半を占めていただろう「生活の場」であるので、R.T.P.を読み進める読者は、語り手と同じように、「パリに居る」のではなく、より狭い空間、つまり「パリの何処に居るのか」、「パリの何処での出来事なのか」ということを本質的に優先して認識しているわけであり、実際、R.T.P.には、パリを舞台とする架空の、あるいはパリに実在する通りや公園の名称、店や建物等の名称が、二百箇所余り登場している。本論で取り上げたコンブレーについて、同様な捉え方が可能だとすれば、大都市パリに比べて明

らかに小さな空間として認識される村であるコンブレーは、十一箇所の通りの名とひとつの森の名、ひとつの教会名、ひとつの広場、ひとつの牧場を有しているにすぎないと言い得るわけである。しかし、語り手の幼年時代を包んでいたコンブレーという空間の中心にあって、人が初めて認識する安全で幸福感に満ちた場所、あらゆる空間認識の中にあって言えば原初形態として生き残り存在し続ける語り手の「寝室」、そこには、他の如何なる女性も取って代わることが不可能な母親が存在していたはずであり、また、その母親が、語り手の枕元で読み聞かせてくれた一冊の本の存在¹²⁾、これらの存在が、語り手の人生のすべてを時間的に貫いていたことを知るようになる R.T.P. の読者の誰しもが、文学の虚構性の中で、架空の地名に真実を見出すことになるのである。

註

- (1) Proust, Marcel. “A la recherche du temps perdu” Édition Gallimard, 1954を用いた。
- (2) Pléiade 旧版の第3巻の巻末には、登場人物名と地名のインデックスがあり、実在架空を問わず純粋な地名が880箇所ほど並んでいる。また、通りや建物の名称なども掲げられている。
- (3) 例えば、比較的コンパクトな詩作品の場合、そのタイトルは、作品を統括しているだけではなく、詩篇の一行のごとく、つまり作品に同化しその冒頭の一行になっているかのような存在でもあるが、小説の場合、作品に掲げられたタイトルの存在は、読書における一定量の物理的時間経過の必要性和眼前に次々と展開してゆく物語の筋を追っているうちに、脆弱なものとなりがちであると思われるが、R.T.P.においては、小説作品としてのその長大さにもかかわらず、総タイトルを始め各編のタイトルは、あたかも詩作品におけるように作品を支えているように感じられる。おそらく、それは、R.T.P.のタイトルがシンプルな対立概念、「失われた時」と「見出された時」、「囚われの女」と「逃げ去る女(消え去ったアルベルチーナ)」などを有しているからだけではない。
- (4) ローマ数字は、Pléiade 版の巻数を、アラビア数字はその抜粋ページ表す。以下の抜粋においても同様。
- (5) 邦訳は、基本的に井上究一郎訳；筑摩世界文学大系、ブルースト 57巻～59B巻、筑摩書房、初版を引用した。以下の抜粋の訳も同様。
- (6) シエナは、イタリアのトスカーナ地方にある都市。直前にあるボヘミアはこの一箇所のみの登場であるが、シエナはその後四回ほどその名の提示がある。イタリアに関連のある地名の早い段階での登場、語り手の寝室との関連等、今後の研究課題のひとつとしたい。
- (7) Madame Robert de Saint-Loup サン・ルー夫人は、R.T.P.の冒頭、作中人物としては最初に提示される。その直後に登場するジルベルトとサン・ルー夫人が同一人物であることを読者が知るのは、Pléiade 版で三千ページも後のことである。
- (8) 様々な説があるが、ここで寝る行為を表す動詞として代名動詞が選択され、複合過去が用いられた結果、過去分詞の性数の一致により、一人称で語り始めた人物が紛れもなく男性であることをその冒頭で謳っている、というのが一般的読者の解釈であり、論者もその点に先ず共感するものである。
- (9) コンブレーが、語り手の母親や初恋の相手ジルベルトの居たひとつの舞台だとすれば、バルベックは、アルベルチーナ登場の舞台である。直後にあるドンシエールは、バルベックの隣町。
- (10) イリエは、現在 Illiers-Combray イリエ・コンブレーが、その正式名称となっている。
- (11) 広く知られているように、作者ブルースト自身の母親の死が、作品中の祖母の死の描写に反映していることは疑いがないと思われるが、語り手の母親の作中人物としての、作品後半における不可思議な不在については、作品構造との関連において再考の必要があるだろうと思われる。
- (12) “François le Champi”のことである。
* 本論で扱った語り手のヴェネチア旅行は、ブルースト自身、1900年4月末、あるいは、5月の初頭に、物語とまったく同様に母親との旅として実際に実現したものがモデルとなっている。ブルーストが当時傾注していたラスキンのイタリア関係の著作との関連も含めて、この現実の旅との関連についても、今後の研究課題のひとつとしたい。